

# 子供の可能性は指導者次第

NPO法人ベースボールスピリッツ 理事長  
宝塚ボーイズ 監督



奥村 幸治 氏

おくむら こうじ  
奥村 幸治

聞き手  
むらたけ いさお  
室舘 勲  
(株式会社 潮流社)  
代表取締役社長



——奥村先生は、イチロー選手のオリックス時代に専属打撃投手を務められ、マスコミに「イチローの恋人」と紹介され話題となりました。また中学生野球チーム「宝塚ボーイズ」を設立して二十二年、田中将大選手を始め多くの甲子園球児を輩出されました。野球という側面から、日本の教育についてお伺いできればと思います。まず奥村先生の生い立ちと野球との出会いからお聞かせください。

奥村 生まれは兵庫県尼崎市で、野球を始め

極め人に聴く

たのは父親の影響です。父親は幼少期に野球をやったかったけれど経済的な理由もあってできなかった。だから私に夢を託したそうです。私の野球のスタートは半ば無理やりでした。幼稚園に行く前に公園で父とキャッチボールをして、そして父は仕事に、私は幼稚園にという毎日でした。そんな毎日だったので、幼稚園でボール投げ二十三メートル、同級生の倍の距離、先生よりも飛ばしていましたね(笑)。幼稚園から帰ってきてからも一人でずっと壁当てをしました。近所の人からも「将来、プロ野球選手になるんやろ」と言われて、いつのまにか自分もそうなりたいたいと思っていました。——大変な英才教育ですね。特に関西は野球が強い印象がありますが、それは風土ですか。奥村 それは夢、ビジョンの具体化が大きいと思います。甲子園球場が近くにあるので、野球少年は皆、夏休みに甲子園で高校野球を

観戦します。スタンドで応援しながら「あそこに立ちたい、あのユニフォームを着たい」と憧れを明確に持つようになります。同様に関東の子供達は神宮球場の六大学野球をみて「あの大学でプレーしたい」と思うようですね。そういった憧れが幼少期に強くあることが大きいと思います。

——「やる気・本気・その気」と言いますが、まさに「その気」が多くの選手を育てるのですね。その後はどうですか。

奥村 小学校で少年野球チームを選ぶ時、三チームくらい見学して、一番厳しいチームを父が選びました。道具の扱いや、挨拶の仕方、姿勢などが一番厳しかったです。おかげで本気で野球をしている先輩方と出会えて、一緒に育ち、甲子園でプレーする先輩の背中を追っていました。

正直、父にやらされることから始めた野球

でしたが、それだけ厳しい練習をしているので、当然チームは強いですし、勝てます。勝つと楽しいので、またやりたいと思います。当時は、やらされる中から「やりたい」を見つけていたと思います。今の子供達は、そういう変換ができる子は少ないように感じますね。

——仕事も同じですね。やらされ意識とやりたいという意識、何が違うんでしょうか。

**奥村** 一つは負けず嫌いであることです。負けるのが悔しいので、自分がどういう努力をすれば成長して勝てるか、ということがわかっている。すると勝ちパターンや闘い方がわかってくる。達成感を得る経験をしているから、何事に対してもやってやろうと思えるのだと思います。

——イチロー選手との出会いまでをお聞かせください。

**奥村** 高校卒業後、知り合いの紹介で野球部

**奥村** 彼は小柄な体格でも通用するようにバッティングの研究を重ねていました。しかしバッティングコーチと意見が合わず、二軍に落とされた。技術論では取り合ってくれず、否定しかされなかったことに、当時イチロー選手は大変悔しがっていました。

二軍のバッティングコーチの河村健一郎さんが、イチローの特性を見抜いて「芯に当てる技術は高いが、身体が小さくて遠くに飛ばす力がない。じゃあ、それを補うために振り子にしてはどうか」と考えて、イチロー選手の代名詞「振り子打法」を研究し、二軍で結果をどんどん出していったのです。

翌年、オリックスの監督が仰木彬監督に変わって、イチロー選手を起用します。「前年二軍に落とされて、悔しい中頑張つて、やっと使ってもらえる機会をいただいた。だから絶対頑張る」と言つて、初年度に二一〇本安

のある会社に就職しました。ただ、野球部の社員が営業で帰つてこず、中々まとまって練習ができない状況でした。結局、野球に本腰を入れるために会社を辞め、プロ野球球団の入団テストに挑戦しました。

当時、七球団受けたのですが、残念ながら本採用にはいたりませんでした。たまたまオリックスでバッティングピッチャーを一人探しており「バッティングピッチャーのアルバイトでキャンプに来るか？ 良ければ採用するよ」とお誘いいただき、晴れて採用してもらったのです。

キャンプ初日にバッティングピッチャーとして投げた時に出会ったのが、二年目だったイチロー選手でした。当時はまだ無名でしたが「こんなすごい選手がいるのか」と驚いたのを今でも覚えています。

——当時は無名だったのですね。

打です（笑）。

——裏側にはそんなことがあったんですね。イチロー選手も仰木監督の想いに応えたわけですね。

**奥村** 仰木監督は、人の気持ちを掴む、本気にさせるのが上手な方でした。コーチ陣もやりがいがあったと思います。何でも監督が決める球団は多いですが、仰木監督の場合は打順もバッティングコーチに聞いて決めていました。コーチの考えを聞き出すことをすごく重視していた方でした。

今でこそ、そういう上司が増えたかもしれませんが、三十年前のトップダウンが当たり前時代に、下の意見を聞く監督は珍しかったです。仰木監督に対して愚痴を言うコーチ陣はいません。選手に対しても同じで「好きにきなさい。プロ野球選手はグラウンドで結果を出すことが一番。そのために、ど



んな練習をしてどんなスタイルでプレーするのは任せます」と。とにかく自分で考えて、試合の中で結果を出すことに集中しなさいと。門限や服装などのルールも自由で、リラックアスして球場に来たほうが結果が出るならそうしよう、という発想の方でしたね。

——指導者として勉強になりますね。

**奥村** プロ野球選手になりたいとずっと思っていましたので、数年間、バッティングピッチャーをしながらも他球団のテストも受けていました。もしくはこのまま、球団で裏方をしていくのかなと考えていました。ただ、ある時、メジャーリーグへの視察の機会をいただいたことが転機になりました。

ニューヨーク・メッツのバレンタイン監督の元で、メジャーリーグのキャンプを三ヶ月見学させてもらいました。やはり日本との違いに驚きがありました。

**奥村** 日本に帰国後、少年野球の現場で、グラウンド整備や道具出しを父兄がやっている場面を見て、違和感を覚えました。私は自分の経験からも、選手自身がやるべきだろうと思っっています。というのも、全ての野球少年がプロ野球選手になれるわけではありません。であれば、野球を通して人間としての基本を育むことが大事だと思っっています。そして一九九九年に中学生野球のチーム「宝塚ボーイズ」

を立ち上げました。

アメリカでの経

験から、選手の自主性を育むことを意識しています。彼らに目標を聞くと皆「甲子園に行きたい」と言います。甲子園に観戦

——具体的にはどのような違いでしたか。

**奥村** 選手の「自主性、主体性」を重んじていた点です。メジャーの選手は練習時間が短く、その内容は各々に任されていました。一方、メジャーの下部組織の1Aなどは逆で、軍隊のような規律の中で、号令をかけて走っていました。その隣でメジャーリーガーは自由に楽しく練習しているので、1Aの彼らからしたら、早くあっちにいきたいと思うわけです。その思いが常に若い子らには染みついていて。若い選手とメジャーリーガーが一緒に練習できるような環境がある。交流できるから「そうなりたい」と強く思うということ。日本では、プロ野球でもチームの規律の中で練習することが多く、自主性で練習することは少ないと感じました。

——やりたい状況をいかに作るか、ということですね。

にいくと、どの学校も礼儀正しく、道具を丁寧に使い、グラウンド整備や挨拶をきちっとしています。すると彼らは「今からきちっとしなければ」と肌で感じるわけです。先輩への礼儀、練習への姿勢、身の回りのことは自分でやる、といったことを身に付けさせることを大事にしています。結果的に先輩たちは活躍していて、一期生から十九期生まで毎年卒業生の誰かが甲子園に出ています。これは中々、他のチームでは無いことです。その中から田中将大選手も生まれました。

——素晴らしい成果です。若者教育という点で、二十年前の中学生と今の中学生の違いなどあればお願いします。

**奥村** 時代とともに環境が変わり、競争がなくなり、努力が当たり前ではなくなりました。昔は野球人口が多かったので、試合に出るために必死で練習して、競争して、試合出場を

勝ち取っていました。でも子どもたちが減ってきて、競争をしなくても試合に出られる子も出てきています。競争する機会が減るにしろ、努力する機会も減っています。ですから「努力して当たり前」ではなく、現在では、子供が努力できることは当たり前ではない、努力できる子は素晴らしい、と捉えないといけません。両親も、子供に競争させることもなく、大事に育てます。その結果、精神年齢が低年齢化していると言われます。男の子では、小学校六年生は四年生並の年齢と、昔と比べ二年も遅れているそうです。

また、昔と比べ、自分の頭で考えることができないうちが多くなりました。ただ、本人に求めて考える習慣がつけば、時間はかかりませんが今の子どもたちも変わります。つまりしっかりと時間をかけて育てないと、彼らが将来成功していくことが難しくなります。育てる上では、

指導者の話をちゃんと聞きますし、試合が終わった後のベンチがきれいです。特徴的なのは、ベンチの紙コップは使い放題なのに、日本の選手は紙コップに背番号を書いて、自分のコップを最後まで使います。物を大切にするとという価値観が世界では全く違います。主催者のカル・リプケンが日本の子どもたちの振る舞いに感動して「あなた達が世界一にならないといけない。野球に対する姿勢、技術。あなた達が世界一になって、こうあるべきだと示してほしい」と言ってくれました。——今後の未来を担う子供達や教育に対して一言ありますか。

**奥村** 私も人生で迷いはたくさんあります。子供達にも壁があると思います。ただ、自分が置かれている立場で一所懸命にやると、明らかになる部分があります。そこに努力すると、また違う形が見えてきます。ですから今

時間がかかっても粘り強く辛抱する必要があるですね。

——自分の頭で考える力ですか。

**奥村** 以前ニュースで見ましたが、英単語の意味を調べる際、スマホで調べるよりも、紙の辞書を使った方が記憶の定着が良かったそうです。つまり、時間や手間をかけたほど知識は定着する。コミュニケーションも同じです。対話をするのでしか身につきません。そう考えると、スポーツや部活動などで多くの人とコミュニケーションを取る時間や手間をかけている人のほうが、脳に対する影響は良いのだと思います。

——奥村先生はU12の世界大会を、日本代表監督として三連覇されています。世界大会を通して、日本人として特筆することはありますか。

**奥村** あくまで比較論ですが、日本の選手は

目の前にあることに全力を注いでほしいです。自分ができること、苦手なこと、得意なことがわかってきます。やりたいことがない、ではなく、目の前のことに挑戦することが必要だと思います。

——この度は貴重なお話、ありがとうございます。

■おくむら・こうじ

一九七二年、兵庫県生まれ。イチロー選手が二一〇〇本安打を達成した時に専属打撃投手を務めたことから「イチローの恋人」としてマスコミに紹介され話題に。

一九九九年、中学硬式野球チーム「宝塚ボーイズ」を結成。田中将大選手らを輩出。

二〇〇八年、NPO法人ベースボールスピリッツ設立。

二〇〇九年より、カル・リプケン世界少年野球大会の日本代表監督に五年連続で就任。二〇一一年からの三連覇を果たす。